

文部科学省委嘱令和6年度幼児教育の理解・発展推進事業

幼稚園教育課程等神奈川県研究協議会

I 目的

幼稚園・こども園の教育課程編成及び実施に伴う指導上の諸問題並びに幼児教育を取り巻く諸課題についての専門的な講義や研究協議等を行い、教職員の指導力を高め、幼児教育の振興・充実を図るために、幼稚園教育課程等神奈川県研究協議会を開催する。

II 日程及び会場 令和6年7月23日(火) 9時15分～16時30分 県立総合教育センター

9:15	受付
9:30	開会 挨拶
9:40	講演 「子ども達の発達の段階を踏まえた幼児教育と小学校教育の円滑な接続について」 講師 文部科学省初等中等教育局幼児教育課 幼児教育調査官 平手 咲子 氏
11:45	事務連絡
12:00	昼食・休憩
13:15	分科会受付
13:30	分科会開始
13:40	提案1
14:10	提案2
14:40	休憩
14:55	分科会協議 ・グループ協議 ・全体共有
15:55	指導・助言
16:15	閉会 挨拶 (各分科会ごと) *アンケート記入

【提案】

●幼稚園の教育課程の編成及び実施等に伴う 諸課題等についての研究協議	
分科会1 (共通協議主題)	〈提案1〉 南足柄市立北幼稚園 〈提案2〉 認定こども園追浜幼稚園
分科会2 (協議主題1)	〈提案1〉 平塚市立ひばり幼稚園 〈提案2〉 湘南台幼稚園

● 協議主題と協議の視点

分科会1 (共通協議主題)	幼児教育施設間、幼児教育施設と小学校間における相互理解の促進 ①幼児教育と施設間や幼児教育施設と小学校間においてどのような連携・共同を進めていくことが考えられるか。また、その際、「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」をどのように活用することが考えられるか。 ②小学校以降の生活や学習の基盤を育成するためには、指導計画の作成や指導の過程の評価・改善等について、どのような工夫が考えられるか。
分科会2 (協議主題2)	架け橋期のカリキュラムについて ①教育の連続性・一貫性を踏まえ、幼保小が協働して「期待する子ども像」や「育みたい資質・能力」を明らかにするとともに、これらを基にして「園で展開される活動」や「小学校の各教科等の単元構成等」を具体的に明確にしながら、架け橋期のカリキュラムを作成していくためには、どのように進めていかなければよいか。 ②架け橋期のカリキュラムの実効性を高めるなど、幼保小の接続の取組について、家庭や地域との連携を図りながら評価・改善・発展をさせ、持続可能なものとしていくためには、自治体や各幼児教育施設・小学校においてどのように進めていかなければよいか。

Ⅲ 分科会の記録

令和6年度幼児教育の理解・発展推進事業（幼稚園教育課程等神奈川県研究協議会）研究成果の要旨

分科会1 (共通協議主題)	幼児教育施設間、幼児教育施設と小学校間における相互理解の促進
------------------	--------------------------------

1 提案内容 南足柄市立北幼稚園〈提案1〉

（1）研究主題のとらえ方

南足柄市では、平成19年度から平成21年度まで文部科学省より研究開発学校として指定を受け幼稚園・小学校・中学校が滑らかに接続する「幼小中一貫カリキュラム」を作成し、実施をした。その後、かながわ学びづくり推進地域研究委託事業により、南足柄市学びづくり推進委員会を中心に、中学校区ごとによりよい連携や接続の在り方について検討し、現在も幼稚園・小学校・中学校の研究主任が集まり研究を続けている。今後は、公立幼稚園が1園になる段階に向けて、南足柄市としての「架け橋プログラム」の作成に着手しようとしているところである。

本園は、南足柄市全域から登園する特例園である。園児は市内5つの小学校区から通園しているため、小学校区ごとの交流は難しいものがあるが、多くの卒園児が入学する南足柄小学校とは日頃より交流を重ねている。コロナ禍においては、それまで行っていた教員や子ども間の交流活動ができない状態が続いたが、昨年度より、交流を徐々に再開した。しかし、架け橋期の重要性について校種間・教員間の温度差があり、過去の交流を踏襲した形式的な交流に終わってしまった。

また、来年度は、南足柄市に5園ある幼稚園が入園希望者の減少により南足柄幼稚園の1園になる。そこで教職員も1つの園に集約されることから他の幼稚園の交流等も理解することに重きを置き、来年度以降に園と小学校で交流や接続の在り方について実質的な話し合いや実践がなされ、来年度以降の「架け橋プログラム」が円滑に作成できるよう配慮し、研究を進めていくこととした。

（2）研究の方法及び研究の重点

- ①幼稚園・小学校の年間を通した交流
- ②「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」と小学校入学後の姿とのつながりを探る
- ③園内研究会の指導案や日々の記録等の見直しと改善
- ④様々な研究会等に参加し、幼稚園から中学校までの連携を深める

（3）研究の内容

- ①幼稚園・小学校の年間を通した交流

ア【園児と児童の交流】

幼児は幼稚園生活において、他の幼児と関わりながら生活する中で、友達のよさや自分のよさに気付くことにより、人に対する信頼感や思いやりの気持ちが芽生えていく。小・中学校の児童や生徒と交流することは、幼児の生活の場が広がるとともに、その関わり合いによって豊かな体験が得られる機会となる。幼稚園教育と小学校教育の円滑な接続に向け、計画的に連携を図っていくために年間計画の作成を行った。

イ【教職員間の交流】

幼稚園教育と小学校教育の円滑な接続を図るため、小学校の教職員との意見交換や合同の研究会や研修会、保育参観や授業参観などを通じて連携を図るようにすることが大切である。また、小学校とのつながりだけでなく、幼稚園間や中学校区間ともしっかりと連携を図っていきたい。

ウ【各中学校区における交流】

学区内で行われる幼小中合同研究会の場を活用した。各園・各学校の教育計画の中に、幼小中連携教育に向けた取組として共通の重点目標を位置づけた。

- ②「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」と小学校入学後の姿とのつながりを探る

幼稚園で育まれた能力や興味関心等、小学校で活かしていくため幼稚園教育要領における「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」と「小学校入学後の児童の姿」のつながりについて幼・小で話し合いの場をもち、まとめることにした。このことにより、小学校教員に幼稚園の学び方について理解していただくことも目的とし、その中で特に幼稚園と小学校の連携の一つとして、職員間の交流を大きな柱とした。資料で具体的な幼児の姿を伝え、小学校教員に入学前の幼児の姿について知ってもらい、園内研究会や保育参

観等で直接園児の姿を見て育ちを実感し、その気付きを架け橋プログラムの作成の柱としていきたい。

③園内研究会の指導案や日々の記録等の見直しと改善

園小連携や接続における取組について園職員で話し合いを行った。交流により小学校への不安感が和らぎ、期待感に変わっていくことが成果として考えられる。しかし、交流をどのように学びにつなげていくかが大きな課題である。そこで、架け橋期に育てたい子どもの姿、小学校へつなげたい子どもの育ちについて、園職員の理解を深めるために「幼保小の架け橋プログラムの実施に向けての手引き（初版）」を読み、架け橋期に育てたい子どもの姿や、園で大事にしたい保育者の役割について協議した。

日頃から使用している日案等に幼児期の終わりまでに育ってほしい姿を記載することにした。それにより保育者の理解が深まり小学校への円滑なつながりができるように考えた。

④様々な研究会等に参加し、幼稚園から中学校までの連携を深める

ア：中学校区研究会参加

イ：市教育研究会：幼稚園部会参加（各担任参加）

ウ：定例教頭会参加

（4）まとめと今後の課題

○年間計画を立てたことで、長期的に見通しをもった交流を進められている。交流に向け、職員間で話をする中で、互いのねらいを明確にしたり、現在の幼児の姿を知ってもらったりすることができる。交流を進めながら、職員間の連携を図っていきたい。

○次年度から、南足柄市立幼稚園は1園となり市内全域から園児が登園する。入学はそれぞれの小学校となるため、市内の小学校との連携の仕方も課題となってくる。職員間で話をすることが円滑な接続につながる一歩と考える。幼稚園側も知ってほしいという思いを伝えるのではなく、小学校教育について学び、互いに歩み寄っていきながら、現状フェーズ1にあるスタートカリキュラムの作成に向けての土台を整えていきたい。そのため、教育委員会の協力を得ながら職員間の交流の場を設け、互いの教育の方法について知り合う中で交流の意義を共有し、継続的に行っていけるようにしていきたい。

2 提案内容 認定こども園追浜幼稚園〈提案2〉

（1）研究主題のとらえ方

「環境を通した教育と人とのつながりの中で」

認定こども園追浜幼稚園（以下、追浜幼稚園省略）では、工夫する力を養い子ども一人ひとりを大切にする保育、環境を通した教育を実践している。日常的にどのように保育が行われるかを検証し、教員が教えるだけの教育ではなく、子どもたちからの学びを引き出すことに重点を置き、将来の子どもの学びにつながっていく保育を実践している。

20年以上前から実施している近隣の小学校の交流と小学校の総合学習での幼稚園訪問などの小学校と一緒に活動している事例などから子どもたちが将来にどう向かっていくかを検証する。また、横須賀市教育委員会の学校食育課の企画による小学校での給食体験にも、ほぼ毎年参加でき、子どもたちの小学校へのスムーズな接続に役立っている。さらに、令和4年度より実施されている小学校の運営協議会に参加することで、小学校での学習の進め方などを知ることができて幼稚園の保育にも活かすことができた。そういった小学校との企画に参加している実践事例について紹介し、幼児教育と小学校教育の円滑な接続に向けて継続すること、そして、その課題を見直して、今後のことより円滑な接続を検討したい。

（2）研究方法及び研究の重点

- ①子どもたちからの発信を大切にした小学校教育との活動事例を通して、幼児教育でできることを提案する。
たくさん遊んで自信をつけること、自分から発見して行動できる力を養うことが大切。
- ②今は、小学校においても教える教育から環境を整える教育へとシフトしつつある。幼稚園では当たり前のように実践してきた環境を通した教育を小学校教育へつなげたい。実際に、公立小学校では「自分から学ぶ」ことを重視している授業が行われている。これから幼稚園が小学校へ向けて何ができるのかも考えていきたい。

（3）研究内容

幼稚園の中での保育が子どもの将来に向けてどのようにつながっていくのか、また、小学校教育へ向けてだけではなく、将来に向けて生活に必要なこと、社会に必要なことを身に付けるとはどういうことなのか。環境を通して学ぶ実践の紹介とその重要性を提案したい。また、小学校と一緒に活動した事例を紹介し、幼児教育

と小学校教育の接続の理解について検証したい。

①追浜幼稚園と近隣の小学校についての紹介（共通する教育目標に注目）

追浜幼稚園の保育の目標

ア明るく元気で思いやりのある子ども

イ友だちの中でもものおじしないで行動できる子ども

ウ創造性豊かな子ども

追浜小学校の教育目標「育てよう 輝く未来」

本気：夢をもち、その実現にむけて努力する

勇気：判断して工夫して、よりよい行動を生み出す

根気：あきらめずに最後までやりぬく

大好き：自分を大切にし、他の人も大切にする

②幼児教育における小学校への接続を見据えたカリキュラムについて

環境を通した教育の事例として、コーナー保育や本物をいかに取り入れるかの事例を紹介する。例) お買い物ごっこ～本当のお買い物 電車に乗って遠足

③小学校との交流の事例

事例1 追浜小学校での給食体験・交流会

(小学校へ行く。小学生がプログラムを考えて、教室の案内、一緒にゲームをして遊ぶ。給食の配膳をしてくれる。プレゼント交換をする。事前に担当教員同士の打ち合わせがある。)

事例2 小学生による交通安全教室と交流

(幼稚園へ小学生が来てくれる。小学生が考えたプログラムで教室を実施。その後、ゲームやプレゼント交換をする。)

事例3 近隣小学校校長が運動会や卒園式などの行事に参加し、園児に話をしてくれる。

(小学校へ行くモチベーションになる。不安がなくなる。)

④小学校運営協議会の活用と意義

令和4年度より追浜小学校が地域の方との交流と小学校教育への理解をテーマにした運営協議会を実施している。追浜幼稚園も参加しており、その中で園長が追浜小学校の授業を年2回全学年参観し園に報告した。地域とのかかわりについて、小学校とも共有できたことも重要であった。

例) 町内会老人会との交流の事例 地域の人のかかわり事例の紹介。

⑤就学前の情報交換の方法と課題（市との取り決めにより活用している事例の紹介）

ア小学校との情報交換について

横須賀市においては、小学校の就学前説明会の際に、幼稚園・保育園・認定こども園との情報交換をすることを保護者から同意を得る。幼稚園等に対しても、情報交換の同意を得たうえで実施する。

イ特別支援教育に関わる情報交換や支援の方法について

横須賀市では、教育委員会より就学前相談を受けた幼児については、黄色いファイルでの情報交換を実施している。幼稚園と保護者が相談して作成し、小学校へ保護者の手で提出している。

（4）まとめと今後の課題

幼児教育と小学校教育との接続について重要なことは、お互いの教育内容と教育方法の理解を深め、つながりをもった教育を考えていくこと。特に教員が一方的に教える教育ではなく、環境を通した教育を共通理解とすることを提案したい。また、人とのつながりの中での接続ができることも理解していきたいと考える。

【幼稚園と小学校の連携】

小学校と幼稚園の教員が話し合い、カリキュラム作成にも関わるようなことがあるとよいのではないかと考える。教員の交流がもっとできるとよい。

【地域の方々、特に高齢者など、人とのつながりと協力体制】

幼稚園も小学校も、地域とのかかわりが重要であるということを改めて感じる。今後も小学校と地域と一緒に係ることができる活動を考えていきたい。

3 研究討議内容

（1）質疑内容

Q 1：小学校に交流を依頼するが、受け入れへの課題がある。また、教員の意識の持ち方により充実度も変わる。園と小学校との連携の取り方を教えてほしい。

A 1：○子どもたちの育ちに必要であることを小学校に伝え、交流計画を再度提案した。

- 幼小の教頭間で電話にて話をする他に、市教頭会の中学校区の研究協議の場で話題として取り上げ、学区として交流計画を共有し幼小中それぞれの立場から意見を聞き計画に反映できるようにしている。
- 所在地の現状として、交流に出かける際はバス利用が必須であることから、スムーズにいかないことも多い。その現状を踏まえ、子ども同士の交流だけではなく教員間の連携を密にしていきたいと考えている。

(2) 視点①について

- 幼保小のつながりにも課題があるが、幼保の横のつながりも課題である。施設同士の架け橋が必要である。まずは、お互いの職員が自由に見学してもよい週間を設定している実践もある。また校庭開放などの負担の少ない交流を続けることで、他の園とのつながりができる可能性もある。
- 幼児教育施設側は、小学校との交流が子どもの学びにつながる場面を見取り、小学校側にその価値や重要性を伝える必要がある。また、幼保小間での温度差を解消するために、「互いを知る」ことの大切さを共有することが重要である。その際、「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」を活用することが有効であると考えられる。
- 幼児教育施設と小学校間での交流を円滑に進めるためには、学校と園の管理職や職員間で交流のねらいや意義を共有することが必要である。その際、教育委員会の協力を得ながら連携を進めることが望ましい。
- 「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」を視点に、交流後の振り返りを共有することが重要である。共有の場として参集型のみではなく、学級だよりなど既存のツールを活用することで、場や時間の設定における課題を解消することが考えられる。

(3) 視点②について

- 小学校以降の指導計画や評価・改善において、「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」を活用することが有効である。これにより、幼児期の学びの成果を小学校教育に接続しやすくなる。また、基本となる「幼稚園教育要領」を改めて学び直すことで、指導計画の作成や評価の基盤を強化することができる。
- 指導計画の作成や指導の過程の評価・改善のために、幼保小間での学び方の違い（幼保では遊びを通した学び、小学校では教科ごとの学習）を理解することが大切である。その際、「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」をツールとして活用することが有効なのではないかと考える。
- 指導の過程の評価・改善を進めるためには、幼保小間での振り返りや情報共有が重要である。参集型の場だけでなく、学級だよりやオンラインツールなどを活用し、効率的に情報を共有する仕組みを整える等の工夫が必要である。
- 「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」も把握し、幼児教育要領の内容の5領域も基本に抑えながら、振り返り→反省・評価→改善していくことが重要である。

【まとめ】

- 幼稚園と小学校での学びのとらえ方に温度差があるため、交流の意義を「幼稚園の終わりまでに育ってほしい姿」を切り口に伝えることが重要。交流後も「幼稚園の終わりまでに育ってほしい姿」を基に振り返りを行い、次の計画に活かす。
- 職員同士が顔を知り、話し合える関係を築くことが重要。異動があっても関係が途切れないと、個々のつながりではなく、組織全体で連携できる仕組みを整える必要がある。職員同士の対話を通じてカリキュラムの評価・継承を進めるべきである。
- 年間を通して見通しをもった交流を行い、形式的ではなく自主的な取組を目指す。「幼稚園の終わりまでに育ってほしい姿」や5領域を基本に据えながら、振り返り・評価・改善を繰り返すことで、カリキュラムの質向上させる。
- 地域や管理職の意識によって交流の進展に差があるため、管理職の意識を高めることが重要。そのためには教育行政の介入や支援が必要である。

4 指導助言

- 「交流だけにとどまっていないか」「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿は、連携の手がかりとして十分機能しているか」「互いの教育内容や指導の方法、教育の連続性や一貫性について理解を深めるために、どのような取組をしているか」を今一度考えて、それを前提に連携することが大切である。
- 交流の回数が多ければよいのではなく、交流までに幼稚園教員と小学校教員とが連携し、活動の進め方を共

- 有していくことが、園小の円滑な接続につながる。
- <交流の年間計画表>に幼稚園側と小学校側の双方のねらいが位置付けられていて、素晴らしい。「何のために交流をするのか」ということをさらに追究し、ねらいや経験させたい内容を掘り下げて記すとよい。また、「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」の視点を加えると、小学校教育との接続へつながっていくのではないか。
 - 各年間計画表は、作成して終わりではなく活用に向けて取り組むとよい。
 - 幼児教育施設側が小学校教育を理解する上で、「小学校学習指導要領解説」(特に【生活編】)を読み、活用するといい。交流時の視点となる。
 - 研究主題のとらえ方に「小学校と一緒に活動している事例などから子どもたちが将来にどのように向かっていくかを検証する」とあるが1校と1園との交わり方は羨ましい。20年以上の経験がある中で具体的な活動が実現できているのではないか。
 - 本物の自然や物を見たり触れたりする中で色々なことを感じていくことを大切にしていたが、子どもたちの「どうなるのかな」「やってみたい」の子ども姿に表れて幼児期の終わりまでの10の姿や資質にもつながっていくのではないか。
 - 保護者に園での活動を見せることで、園で大切にしていることを伝えることができている。
 - 教員の気持ちが、交流しなければいけないにことに先走っていないか振り返り、なぜ交流するのかを忘れてはいけない。
 - 小学校の授業が変わってきていている。お互いを知る大切さを感じており、幼・保・小が同じ思いで連携できたらよい。
 - 小学校の全学年と交流できたらよい。幼稚園の最高学年で自信をもって進学した子どもたちが小学校に入ると、一番小さい子と見られてお世話され過ぎてしまい、できていたことができなくなることにガッカリしてしまう。交流について改めて考えるよい機会なのである。
 - 「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿・指導要録をどのように小学校で活用していくのか」「1年生になった時に困っていることは何か」等の具体的な話ができるとよい。

分科会2 (協議主題2)	架け橋期のカリキュラムについて
-----------------	------------------------

1 提案内容 平塚市立ひばり幼稚園〈提案1〉

(1) 研究主題のとらえ方

本園では、昨年度から架け橋プログラムについての研究を始め、昨年度は、平塚市の子どもたちが「不安から楽しみへ」と就学に期待をもてるような幼小の交流について実践・研究を行い、市内の幼保小中連携学習研究会にて発表を行った。今年度は、架け橋プログラムを進めていく中で関係を築いた地域の保育園・小学校の教職員、その他関係機関と共に、「架け橋期のカリキュラム」の開発を進め、子どもの育ちの姿から幼児教育と小学校教育のつながりを見出し、子どもたちが幼児期に得た学びを生かし、深めていけるような教育方法を探っていきたい。また、この取組が今年度だけのものにならず、持続可能で、発展的なものになるようにするためににはどのようにしたらよいかについても検討していく。

(2) 研究の方法及び研究の重点

『子どもの育ちと学びをつなぐ架け橋期のカリキュラムの開発に向けて』

- ①昨年度の連携・交流から接続の課題点を探る
- ②幼児教育と小学校教育の相互理解を深める
- ③「目指す子ども像」を実現するためのカリキュラムの検討
- ④関係機関との連携を図る

(3) 研究内容

- ①昨年度の連携・交流から接続の課題点を探る
 - 互いの教育を見合うことができる機会を増やす必要がある。また、参観の記録を残すことで、園内の教職員や小学校の教職員とも共有しやすくなるのではないか。
 - 地域の小学校の教職員と目指す子ども像について話し合った。地域の教育を考えていくには、地域にある他の幼児教育施設の教職員等、より様々な立場の教職員と話し合う必要がある。

○年度内に話し合った内容や連携・交流の成果を次年度以降に引き継ぐ手段がない。よかつた内容を引き継ぐことができるカリキュラムが必要である。

②幼児教育と小学校教育の相互理解を深める

架け橋期のカリキュラムを作成するには、幼児教育と小学校教育の相互理解を深めることが重要であり、土台となっていくと考えた。そのため、相互理解を深めるために、幼稚園としてできることを考え、以下の4点を実践することにした。

ア互いの子どもの姿やカリキュラム等について話し合う機会をつくる

地域の保育園・小学校の教職員に声をかけ、「架け橋期のカリキュラム検討会」を開催した。検討会では、幼稚園教員が「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿（以下「10の姿」とする）」を解説し、その後、年長児の遊びの姿を記録したドキュメンテーションを見合い、それを基に幼児期の子どもの育ちについて話し合いとした。

イ互いの保育・授業を参観する

互いの教育を参観する機会を増やし、参観のねらいを明確にした。授業参観の際には、小学校での子どもの生活や学習の姿を記録し、参観後、記録を基に話し合いを行い、「10の姿」が小学校の教職員のどのような援助や環境構成によって引き出されていたかを検証した。

ウ「10の姿見取り表」を作成し、活用する

互いの保育や授業参観をする際に、「10の姿」のキーワードがあると、子どもの育ちをとらえやすくなると考えた。そこで、教職員が共に子どもの育ちを検証するためのツールとなる「10の姿見取り表」を作成し、活用しながら授業参観を行った。

エ事例考察から育ちの姿のつながりをとらえる

年長児の育ちが分かるエピソードと小学校の授業で見られた子どもの姿から、それぞれどんな「10の姿」が見られたかを分析し、育ちや学びのつながりを見出した。

③「目指す子ども像」を実現するためのカリキュラムの検討

平塚市は、令和5年度に幼保小連携調査部会を立ち上げ、「平塚市立園小学校架け橋期のカリキュラム（試案）」を作成した。本園でも、この試案を基に地域の架け橋期のカリキュラム作成を進めている。今年度内に、「第2回、第3回架け橋期のカリキュラム検討会」を開催し、互いの教育計画や参観の記録、事例を基に話し合い、カリキュラムに記載したい内容について考えていく。

④関係機関との連携を図る

○③と重複するが、本園を含む市立幼稚園、こども園、保育園、小学校の教職員及び教育委員会の指導主事、保育課職員が参加している幼保小連携調査部会にて関係機関との連携を図ってきた。

○地域ごとの架け橋期のカリキュラムを開発していくにあたって、地域にある様々な施設やあらゆる立場の教職員と話し合う必要があるが、幼稚園だけでその機会を設けることは難しい。そこで、教育委員会主催の園長会等において、地域の小学校へ進学する複数の幼児教育施設と小学校が交流・連携を行い、架け橋期のカリキュラム開発を進めていくには、自治体の担当部局同士の連携や、自治体のバックアップ（合同研修会や協議会の開催等）が必要であることを繰り返し訴えた。

（4）まとめと今後の課題

幼稚園教育要領を丁寧に読んでいく中で、「幼児一人ひとり…」という言葉が教育要領のいたるところに記載されていることに気付き、改めて幼児一人ひとりの発達の特性を理解し、その特性や発達の課題に応じた指導をすることの大切さを再確認することができた。

今まで週日案、日案にはクラス全体に対する環境構成及び教員の援助を中心に記載していたが、幼児一人ひとりの発達の特性を留意することが大事だと考え、新たに個別に対する環境構成及び教員の援助を加えることにした。そうすることで、クラス全体だけでなく個別を意識した指導の方向性が明確になり、より確かな一人ひとりの成長を促すことができるようになってきたと感じる。

エピソード記録を作成し、全教職員で意見交換をすることで、多様な考え方、見方があることに気付き、指導方法の改善を図ることができた。

毎日のねらいを意識して幼児の姿を観察していくことで、幼児の新しい一面に出会う場面が増えるとともに保育を見直すきっかけになった。また幼児の発言を今まで以上に注意深く聞こうとする意識が高まってきた。

毎日、多様な場面での幼児の姿を記録するとともに、記録を基に全教職員が話し合うことを通して教職員間の交流ができる、幼児理解が深まることで指導の在り方の改善につなげていくことができるようになってきた。

今後はさらに研究を進め、実践を通して検証をしていきたい。

2 提案内容 湘南台幼稚園〈提案2〉

(1) 研究主題のとらえ方

- ①藤沢市幼稚園協会加盟幼稚園、認定こども園で、2023年度の幼小連携の実際について調査し、「幼保小架け橋プログラムの実施に向けての手引き（初版）」に照らして検討する。
- ②「幼稚園教育要領」では小学校教育への円滑な接続に向けて、幼稚園の児童と小学校の児童との交流の機会を設け、連携を図る大切さが指摘されている。あわせて、相互参観を通して教員同士がお互いの教育内容などについて相互に理解できるよう、幼稚園と小学校が組織的に連携する大切さが指摘されている。小学校教育との円滑な接続に向けて、幼児期の遊びを通した総合的な学びを、可視化することで、あらためて幼児教育の質的向上について検討する。

(2) 研究の方法及び研究の重点

- ①加盟園29園を対象に、2023年度の幼小連携・接続の実態についてウェブアンケートを実施。
期間：2024年3月22日～4月10日
回答率：71.4%
調査者：藤沢市私立幼稚園協会
- ②湘南台幼稚園での幼小連携・接続の実際
 - 小学校との交流
 - 小学校教員と幼稚園教員の差
 - 今後の課題について

(3) 研究の内容

- ①2023年度の小学校との交流活動実施園が50%、実施しなかった園が50%だった。

【アンケート結果】

ア小学校との連携・接続に関する園内での業務分掌。

園内の業務分掌が、「明確」「やや明確」を合わせ55%が、何らかの業務分掌をしていた。

イ2023年度の小学校との交流活動の具体的な内容（自由記述）

回答を寄せた園のうち、40%の園から具体的な交流活動の記載があった。

a 小学生が来園して交流する

b 児童が小学校に行く

○年長児と1年生交流（秋祭り、一緒に製作、お店さんなど）

○年長児の小学校見学（授業、校内、体育館、校庭）

c 教員相互の研修を行う

○幼稚園教員による授業見学 宿泊研修、学園研修会、学園宗教会

d 小学校教職員が来園する

○小学校校長による保護者説明会

○小学校教職員による保育見学

ウ幼稚園児指導要録と合わせて、小学校へ引き継いだ配慮内容（複数回答）

a 健康面で配慮が必要な子ども（欠席が多い理由／弱視・難聴・発音など）

b 生活面で配慮が必要な子ども（片付けができない／すぐ手が出るなど）

c 学習・発達面で配慮が必要な子ども（外国語をルーツとする／発達の問題）

d 保護者や家庭面で配慮が必要な子ども（保護者のトラブル／過保護過干渉／家庭内問題）

エその他（自由記述：学校から聞かれたことを回答／子どもの長所・強み）

- ②私は小学校・幼稚園に勤務してきた経験がある。小学校教員と幼稚園には子どもたちへ眼差しの視点に差があると感じている。教育と保育の差ともいえようか。「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿（以下10の姿）」のとらえ方を例にしていきたい。

そもそも10の姿とは、5歳児修了時の姿であり、3・4歳児それぞれの時期に相応しい指導や経験の積み重ねが「10の姿」につながっている。小学校では、学びがゼロからスタートするのではなく、幼児教育で身に付けたことを生かしながら教科等の学びにつながる。

この10の姿で最も勘違いが起きやすいのが「到達目標」ではなく「方向目標」だということである。

10の姿とは、あくまで手がかりであることを理解し、10の姿だけに頼るのではなく、子どもたちは幼稚園では具体的にどのような姿なのか、小学校ではどのような姿なのか、1年生の段階では、具体的にどのような指導が適切なのか、などのことを話すために「10の姿」はある。

(4) まとめと今後の課題

幼小の連携がうまくできていない場合、幼児期の育ちは一度分断され、新たに小学校でゼロからの育ちが始まる。しかし相互理解により、幼児期の教育を学校教育に活かすことができるならば、学びはより広げていくことができる。

また、保育所保育指針解説に以下のようにある。

『子どもの発達と学びの連続性を確保するためには、「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」を手がかりに、保育所の保育士等と小学校の教員が共に子どもの成長を共有することを通して、幼児期から児童期への発達の流れを理解することが大切である。すなわち、子どもの発達を長期的な視点でとらえ、保育所保育の内容と小学校教育の内容、互いの指導方法の違いや共通点について理解を深めることが大切である。』

入学してくる全ての園を見るのは大変である。しかし、1～2園でも修了前の子どもの姿を見学するだけでも、「育ち」がわかる糸口になるのではないだろうか。

3 研究協議内容

(1) 視点①について

- 幼保小の連携がうまくいっている自治体の例として、小学校に学区内の連携園が集まり研修を実施し、オンライン講演を聞いたケースが挙げられる。この研修をきっかけに、顔を合わせる機会が増え、協議内容を可視化する取組が進んだ結果、各地区で連携の機会が継続的に実施されるきっかけとなっている。こうした研修の実施は、カリキュラム作成の基盤となる話し合いを深める重要な手段である。
- 教員間の意識と幼保小の教育の理解が重要であり、行政がカリキュラム作成に関する理解を深め、話し合いの音頭を取ることで進めやすくなる。現場では、問題意識を共有し、互いに伝え合える関係を築くことが必要である。相模原市のように、作成されたカリキュラムを基に話し合いを進めることで、現場に落とし込む具体的な取組が可能となる。
- 提案された「10の姿見取り表」は、わかりやすく、子どもの成長を具体的にとらえるための有効な手段であり、幼稚園と小学校の教員が互いの教育要領・学習指導要領をよく読み、理解を深めることが重要であると感じた。今後、幼稚園教員が小学校の授業を体験するなど、実践を共有する機会を設けることで、教育の連続性を具体化できるとよいと思う。
- 子どもの発達と学びの連続性の確保が大切である。そのためには、保育士等と小学校教員がともに子どもの成長を共有する事を通して、幼児期から児童期への発達の流れを理解することが大切である。

(2) 視点②について

- 連携後の振り返りを行い、見てもらった内容について解説し、大切にしていることを話し合う場を設ける必要がある。一つの幼稚園だけでなく、地域全体の園を巻き込み、市町村ぐるみで実施することで、持続可能な取組へと発展させる。
- 各自治体での取組状況には差があり、年間を通して活動している自治体もあれば、進んでいない自治体もある。引継ぎや情報交換の日程調整が難しいという課題に対して、自治体と連携し、コーディネーターとして活動を支援する存在が必要である。教員の発信だけでなく、子どもの言葉をきっかけにした連携の形も有効である。

【まとめ】

- 幼稚園・保育園・こども園と小学校の連携交流は各自治体や地域によって大きな差がある。カリキュラム作成以前の課題として、一つの小学校区にいくつもの園がある地域も多く、園毎に学校が対応して連携交流を進めていくことは大変な負担になるのではないか。多種多様な就学前教育保育施設を横断的にとりまとめ、地域の公立小学校とつなげていく役割が自治体に求められていると感じた。
- 幼児教育と小学校教育の接続についてはすでに何年も前から様々な言葉で課題が論じられているが、園と学校、互いの教育内容の理解も依然課題となっているように感じた。幼児教育と小学校教育の違いを互いに認識し合い、地域の子どもを中心とした継続的な教員同士の学び合いができる場が必要とされているのではないだろうか。架け橋期のカリキュラムにおいては、教員同士の理解がベースとなり、学び合いの結果が盛り込まれ、次の年に継続していくためのものとなっていくことが理想的である。
- 幼稚園と小学校がそれぞれの到達目標や学習指導要領に基づく活動内容を相互に理解し、地域や行政の協力を得ながら年間行事に交流の機会を組み込み、教員や園児・児童が連携を深める仕組みを構築する必要がある。

4 指導助言

- 協議の視点②について「架け橋期のカリキュラムの実効性を高めるなど幼保小の接続の取組について、家庭や地域との連携を図りながら評価・改善・発展させ持続可能なものとしていくためには、自治体や各幼児教育施設・小学校においてどのように進めていけばよいか」とある。年度が変わり子どもや教員が変わっても継続できるものということや、幼保小だけでなく自治体という言葉が先頭に入っていることから、自治体と連携・協働のもとカリキュラムを開発していってほしいという思いが込められているととらえられる。
- 平塚市立ひばり幼稚園では、架け橋期のカリキュラムの開発の中で、これまでのつながりをもとに、地域の幼保小の先生方に向けて接続の重要性を発信し、話し合いの場を設け、「10の姿見取り表」を作っていくことで幼小互いの教育を理解し合うことができた。特に実際の交流を通して、「互いに学びのある活動を行う、共に振り返りを行う」「記録を残す」「地域でどんな子どもを育てたいのかを話し合う」「互いの保育・授業を参観し気付きや記録を基に話し合う」「事例考察や育ちの姿からつながりをとらえる」といった過程を丁寧に行っているように見える。最初から完成形を作り上げるのではなく、年ごとに改善していくようなベースになるカリキュラムの作成が大切であり、年度が変わっても引き継ぎ、積み上げていける成果物を作成したいという思いが感じられた。この取組を着実に積み上げていくことで、持続可能な架け橋期のカリキュラム作成につながる。
- 幼稚園では3歳児から5歳児までの発達の連続性を常に考え、卒園までに身に付けるべき力を担任が意識し、保育を行うことが重要である。遊びを通して学びになるとと、カリキュラム上の計画を混ぜ合わせながら、保育・教育を行う事が大切である。また、子どもたちの「やりたい」という気持ちに耳を傾け、それを実現する環境づくりをしていくことで子どもと保育者の間に信頼関係を築くことができる。このような保育を行うことで、子どもたちは小学校では「何を学ぶか」ではなく「どのように学ぶか」という考え方をもち、自由で伸び伸びとした生活を送ることができるようになる。
- サーバントリーダーといった役職を補うことで、保育者、教員間の交流もうまく循環するのではないか。
- 相模原市、平塚市はすでにカリキュラムの架け橋に取り組んでおり、小学校や地域との連携も取れているので、推進が進んでいる地域を真似して多くの市町村が行政も巻き込んだうえで、積極的にカリキュラムの架け橋に取り組んでいく必要がある。